

飛驒の「ことば」と風土の考察

——飛驒調査報告第一報——

大谷 千尋

飛驒は岐阜県の別天地であるといわれている。飛驒川に沿って北上するとき、高山本線白川口駅から先は、兩岸にせまる高い山なみの内に点々と散在する人家か、山の中復にまてしかみつくように建っているのを見かけるようになって、いかにも山の国へ入るといふ気分をそそられる。と、やかて「ひた金山駅」——この駅のある地は実は美濃国に属しているか——に着いていよいよ飛驒の国に入るわけて、ここから中山七里の山狭を進む汽車も、思ひなしかあえきあえき行く感じの上りか多く、この鉄道のなかつた時代を想い描いて見たら、美濃路とはつきりへたてられた国を意識させられるたろう。温泉郷下呂あたりから奥はしばらく山か両側に退いて、ちょっとした平地を見るか「山の国」にはかわりない。

分水嶺「宮峠」を越えて、川の流れも北へ向うようになると、別天地飛驒の感はいよいよ深くなる。高山市の街を抱く盆地か、一時首をしめるように細くなった先に、国府町から古川町へかけての平地か、むしろ旅人を驚かせるように広かってみせるか、「ひた古川」から二つ程の駅を過ぎて「角川」（河合村）に着けば再び深い狭谷の様相を見せ、峨々たる山か押しせまること十数キロ、北の富山平野との間に完全な隔絶を感じさせられるのである。もし古川の町から神原峠を越えて神岡町へ入るならば、或はまた、高山の街から丹生川村を経て上宝村の平湯温泉や蒲田の温泉郷へ入るならば、そこ

にはまたそれて一つの別天地を形つくっていることを感じるし、西して清見村から荘・白川村の合掌造り部落へ入るならば、いわゆる桃源の秘境か、ついそのあたりに、近くまであったかと思わせられるような景観をととめている。

宮峠の手前久々野町から、飛驒川の上流をたどって朝日村、高根村へ入ってもこれまた一つの別天地であることを思えば、まさに飛驒は一大秘境と呼ばれるにふさわしいたろう。近來各種の研究機関か、そして調査人か、そくそくとこの地の踏査に入りこんだのもゆえなしとしない。地勢的に他国とへだてられている上に、幕末一七七年間を、いわゆる天領の地として特別な施政下におかれたことや、一ケ年の半にも近い長期を冬將軍の威のもとに左右せられて生きて来たこの土地に、特異な習俗民風の温存せられることは想像に難くないからである。

しかしながら、最近三〇年間における飛驒の様相変化には著しいものもあり、もはや、いわゆる別天地的相貌から脱した面も多分にあることを忘れてはならぬたろう。昭和九年（一九三四）の高山本線開通を一大転機として、沿線地域における衣食住の様式に急速な進展を見たことはいうまでもなく、その後の交通報道機関の発達、もはや長くこの地を「秘境」に止まらしめなくなっているの

ある。特にラジオの普及は、その言語生活の革新を促し、最近の青少年はもはや地域の特異な方言訛語等を解しないものか多くなっているのか実情である。言語生活の革新は、当然生活様式の上にも思想的にも情緒的にもひびくところが大きく、文字通りの「秘境」からの脱却を将来する。したかつて、いまこの地の踏査に入るものか、あまりにも珍奇なるもののみを求めるとすれば、あるいは失望を感ずることさえなしとしないだろうか、それだけにまた、今まで温存伝承せられて来た特異なものをこの際に調査集収することのもつ意義も大きい。わたくしはいま如上の見地に立って、この「山ひだの中にある」かゆえに「ひたのくに」とよはれたという——真偽の程は別として——この地に現存する特異なことはを考察し、その風土のおもかけを描くとともに、この地に伝承され来った習俗——生活を知るよすかとしたいのである。

本 論

飛驒の方言訛語の研究については、昭和三十四年の土田吉左衛門著「飛驒のことは」（濃飛民族の会発行）に参考資料として載せるところだけでも、古く延亨二年（一七四五）長谷川忠崇著の「飛州志」、明治三十五年大野郡教育会発行の「大野郡方言訛言集」をはじめ、大正昭和の時代を通して十数種の研究書があり、特に昭和七年荒垣秀雄著「北飛驒の方言」の如き、発音標記にも意を用いたものがあるし、「飛驒のことは」に収める語数は凡そ九千七百に及んでいて、語彙的収集は一応の大成を見ているかに考えられる。したかつていまここに考察しようとする言葉は、これらの資料の中から、特に興をひかれる語——即ち山の国「ひだ」の地方色を強く感じられるもの、風土的行事・風土的生活を膚に感じさせられるものや、

古い時代のことばか、かかる地域なるか故に、温存継承せられて来たかと思われるもの等若干を挙げて、現地訪歴による実証を試みたりその語義の解明を深めようとするのが主たるものである。もっとも訪歴の途次、思いがけずも新に拾い得た語に一段とこの地の風貌に見入らせられる思いのしたのもあって採択することにしたか、紙面の関係もあって、極めて少数の語に限らざるを得ない。

一、めとり（めとり風）

大野郡宮村の代情山彦氏から聞き得た語である。「めとり」は「ねこやなぎ」（川やなぎの芽を出したものを）を呼ぶ方言であるか、この地方では古くから早春の風——春を感じさせられる風のことを「めとり」とも「めどりかせ」とも呼んで来た。雪にとざされた長い冬こもりの生活に、「春」を待つ心の一きわ強いこの地のひとひとに、雪解け水に生き生きとして来る小川の岸に芽ふく柳は、「春来たる」のよろこびをうたうさきかけとして、ほのぼのと心のあたたまる思いで見られるにちかない。「めとり」を見るようになればもう春である。思いをなしか膚をなてる風もとこかなごんて来たようである。——いやこの風か「めとり」を呼びますのであらう。……ひとひとはかくてこの風を「めどりかせ」と呼んだものにちかない。いわゆる「春一番」に相当するものであるか、この方かはるかに趣も深く、自然の風物の中に生きるひとひとの心をよくあらわしていると言つてよい。

二、柿 あ ら れ

柿の花か白く一面に散り敷く頃ともなると、前記「めどりかせ」の「語を生んだひとひとは、これを「柿あられ」と呼ぶに至った。

いわゆる「麦秋」に相当する季語としてまことによく季節感をあらわし、またたとえ得て妙というへきこととはである。素朴に自然のふところ生きる人々の素直な目と心とつかんだ情景であり、その実感はかかる優雅なことはを生んだのである。

三、かんとうち

熊原政男著「飛驒の年輪」（昭和四十二年、錦正社）に、桃の節句の行事を紹介して、「金山町では近所の子供をお互いの家に招いてこちそりをふるまうので、このことをガンドを打つといっている。その意味はわからない。」としている。ところか、たまたま飛驒の郷土研究誌である「飛驒春秋」第一〇年・第四号（昭和四十二年四月二十日発行）の中で、高山市在住の郷土研究家桑谷正道氏がこの「ガンドウチ」の語源を論じて三つの仮説をこころみている。いまその要点だけをあげてみると、

(1) 「かんと」は「鋸」で、「うち」は目立てをしたり修理するごと。つまり騒々しいこと。したかつて騒ぎながら悪童達か雛さまの菓子を貰うこと。

(2) 「かんと」は「灯り」。「ほんほり」に通し、「うち」は「歌って」の転化。つまり雛さまの前で歌って菓子をもらう意。

(3) 「かん」は「願」、「と」は「盗」。願って盗むこと。とし、このうち(1)か不難に思われるとしているのである。

「ガンドウチ」の「ガンド」に鋸の字をあてているものに、昭和三十四年十一月刊の「益田郡川西村誌」かあって、大鋸のことを「かんと」と呼ぶのはこの地方一帯から美濃の山間部にも及んでいるほどであるから、桑谷氏も「かんとうち」にこの語を連想せられたものかと思われるか、それは全く当らないことを、さっそくに指摘し

たのか岐阜県立斐太高等学校の国語科担当教諭大野政雄氏である。

即ち前記飛驒春秋の翌月号において、氏は「かんと」は元来「強盗」を宋音読みにしたこととはであること、強盗に押し入るのを「かんとうち」物を強奪するのを「かんとひき」（筆者注 益田地方で「かんとうち」というのを大野郡宮村では「かんとびき」といつていることを、桑谷氏か紹介しているのので、その「かんとびき」に対する解釈である。）というのであって、この勇壮な語感か腕白小僧ともをよるこはせて、よその家に押しかけ雛さまを見てこれをほめ、お菓子をねたったりおおっぴらに失敬してくることを「かんとうち」というようになったのたと思うと説いているのである。

この解説によって、「かんとうち」の語義は明確な解答を与えられたわけであるか、尚大野氏か全国方言辞典所見として、静岡県や愛知県の一部には雛祭りのお供えを下けてたべることや、お供えそのものをも「かんと」とよぶ地方があるようと付説しているところを見ると、この風習は可なり多くの地方に存在したもののようになっていると思われて興をそえられるので、やや冗長に流れるけれども、もう少し付け加えて見たいと思う。実は私の郷里（美濃国の北辺で飛驒に近い山村―現美濃加茂市三和町）でも、私の少年時代にはこのことか行なわれていたものである。雛祭りの終りころになると、そのお供えの煎り豆やあられを、友たちとともに食べながら、「かんとうちノ」―「かんとうちノ」とはやしたた記憶がある。子供心に「うちつ」という語感から、投げつけることを連想していたものらしい。

念のために上田・松井両博士共著の大日本国語辞典（大正四年・富山房）にあたってみると、「かんだう」は「強盗の字の唐音」とし、浄るり「長町女腹切」（元禄十三年―一七〇〇―上演）におけ

る用例

「この半七を、掬児の、騙りの、かんだうのとは。何時騙りした、盗みした……」

その他を載せてあるほか、「かんだうつう」を「強盜にはひる」ととして「孕常盤」から引例してあるし、大言海(大正七年富山房)にもほぼ同様な解説がある。本学の栃原助教から聞くところでは、その郷里(熊本)では今も、辻強盜におそわれたりすることを「かんとに逢った」というそうだから、案外今もこの語の活きている地方があるのかも知れない。

いすれにしても雛祭りの「かんどうち」は可なり多くの地方で行なわれていたものらしく思われるし、わけても山の子供達にとって、まことに楽しい行事の一つであったにちかないか、次第に忘れ去られていった地方が多いのだろう。高山市の前郷土館主事小林幹氏に質したところでは、このことは知らないけれども、雛祭りの時には子供たちか他家の雛を見てまわる風習もあったし、子供か寄り集ってお互に他家のお供え物を勝手に食う習慣もあったのだから、大正年間に、小学校でこの習慣を禁止したために、はったり止んでしまったとのことである。

「ひなさま見せてくれ／おそうてもほめるに／」とはやしたてなから、群をなして家々をまわり、その供物を勝手に食へることは、いわゆる旦那衆の子供も、三文菓子屋の子供も、全くその階級的な格式を忘れて一つにとけあうことのできるよい機会でもあったのだか、他家へ勝手に上りこんで、無断でお供えをとることかよくないという理由で禁止されたもので、あまりにもおとなの考え方に落ちたものではなかったか……と、氏は古い時代のよさを回想するような思い入れて語ってくれたのだから、事の是非はともあれ、高山市で

は比較的早くこの風習がなくなつたらしい。

然るに、益田郡萩原町では、現在も「かんどうち」かつづいていてのこととて、たまたま一主婦(六〇才位)から聴いたところでは、戦前まではお互に子供を雛祭りに招待しあつてご馳走をしたもので、それを「かんどうちによはれていく」と言つたものだから、いまはその風習は止んだけれども、子供達か、もらい物を入れる為の袋など下げながら、「おひなさま見せとくれ」と呼び歩いて、供物の菓子などをもらつて廻ることだけは現存することであつた。

尚、下呂町久野川の部落では、やはり「ひなさま見せとくれ」と言つて他家へ上りこんだ子供か、そこのお供え物を平気で食へる習慣は今もつづいてるか、「かんどうち」ということは、もはや可なりの年輩者でないともあまり使わなくなつてしまつたという。

以上冗長をかえりみず述べてみたのは、「かんどうち」の行事か古くは可なり多くの地方で行なわれていたものらしいことと、それが次第にすたつて来て、いまでは山村地帯の一部にだけ残存しているのではないかということ——それもやかては亡ひてしまうのではないかを思うからで、少くとも元禄の昔から三百年間も生きて来た「かんどち」という言葉か、いまや亡ひ去ろうとして、わずかにその命脈を飛驒の一部に保っているのかも知れない——前記熊本市の他にもあれは別だか——と思うと、何やらこの一語に愛着を覚える思いがするからである。

それにしても「かんどうち」という行事が起つた理由は何か、大野政雄教諭の説くように、その勇壮な語感か腕白小僧ともをよるこはせてかかる行動を誘ひ出したものかとうかは、もう少し考えて見たい。ひな祭りが上巳の日に行なわれるに至つたのは室町時代頃からであると言われているし、それは上巳みづせきの夜よに由来したものらしいこ

とか大言海に見えているから、あるいは「みそぎ」の人形（ひとかた）にかたとった雛に供養し、その供物を散することによって災厄を払う意味で、多くの人々に供物をとってもらうことかのそまれるようなところから起った風習ではないか。なお究明を要するであろう。

四、お お あ し（大足）

大足踏みさも 一夜はこされ

五月過ぎての 農休みに （田植歌）

ここにいう大足は、いわゆる田下駄に属するもので、元来田下駄は深田に足をとられぬように、あるいは緑肥などを水田へ踏みこむために着用するものであるか、この大足は一般の田下駄とはややその使用目的が異なるもののように見られる。構造は幅凡そ三〇糎、長さ六〇―八〇糎程の板に鼻緒をつけ、且、手綱をつけたもので、この手綱で繰りながら歩くのであるか、足をとられぬ為に用いるよりも、田の表面を平にするために使われることか多いのであって、すき起した田を丹念に掻きならした上に、この大足をつけて隅から隅まで歩きまわり、鏡のように平にしたところへ井状の線を引いてから（その為の農具も出来ている）植付をするのかこの地方のやり方なのであって、かつて「国民学校」時代の国語読本の挿絵で、植付を前へ向って進んでいるのが問題にされたことかあったけれども、飛騨では問題なしに前へ前へと植えて進むのである。一本の張り綱をたよりに後さかりに植えつける必要は全くないわけで、井伏に線を引けるまできれいならず作業かこの「大足踏み」であり、それをする人が「大足踏みさ」である。田一面に、隅から隅までこの大足をあやつりながら歩いているのを見ると、いかにも米作りの執念

とてもいうべきものを感じさせられる程で、この大足踏みは大へんな労働である。近來農機具の発達につれ、こうした方法も漸く改められるかとは考えるけれども、昨今でも、この大足踏み風景は決して珍らしくはない。一毛作水田の、且は田圃の乏しい地方が生んだ増産のための一農具ともいうべきか。

五、つ す り さ し

「こおろぎ」の一種を「つすりさせ」と呼ぶのは東濃地方山間部でもかなり広くに及んでいる。秋の深くなった頃、家の中まで入って来て、かまとの近く、焚木をおくあたりのものかけて鳴く声は、子供心にも秋の深まりを思わせられたことを記憶しているか、飛騨地方ではこれを「つすりさし」「つすれさし」「つんすりさし」といろいろに呼ぶようである。

古今集巻十九の俳諧歌に「秋風にほころひぬらし藤袴つすりさせてふきりぎりす鳴く」があり、この「きりぎりす」かいまの「こおろぎ」の呼び名であることは周知のところであるか、「きりぎりす」と「こおろぎ」の呼び名が入れかわったのは何時の頃からだろうか。万葉時代には今と同じように「こほろぎ」と呼んでいたものと思われるのに、古今集時代に入れかわり、そしてまた何時からかもとへかえっているわけである。

（参 考）

○夕月夜心もしぬに白露の置くこの庭に蟋蟀鳴毛（こほろぎ鳴くも）

（万、一五五二）

○庭草にむら雨降りて蟋蟀之（こほろぎの）鳴く声聞けば秋つきにけり

（万、二一六〇）

○秋風の寒く吹くなべわかやとの浅茅かもとに蟋蟀鳴毛（こほろぎなぐも）

（万、二一五八）

等の「蟋蟀」は「こほろぎ」と読んだものにちかいかなく、今ではその読むのか常識になっていくといつてよい。「蟋蟀」は古く詩經に見えるものであり、その註疏によれば明らかに今のおおろぎを指しているとは解せられるから、万葉集もこの文字によってこおろぎを表わしたものにちかいかないし、語調の上からも「きりきりす」では当らない。

古今集時代に「きりきりす」といれかわった呼び名か、またいつの時代にもとへかえったか、機を見て更に考証してみたい。

ともあれ、土間の片隅、かまとのあたりまで入って来て鳴く声を、格別あわたたしくやってくる山国の冬仕たくに追われている農婦たちか、「つずりさせ」ときいて冬衣のつくろいにせき立てられる思いをしただろことは想像に難くない。土に生きるひとひとには、一匹の虫も共に生きるものとしての共感か深かったのではなからうか。

六、てすちおとししみたれおとし

山の国飛驒の冬は駈け足てやってくる。乗鞍登山の客足が八月も半は過ぎると急に減って来るのを境に、もう「秋」の気配を感じる朝夕が多くなって、ものの一ヶ月もすればやかて「紅葉」のうわさが出はじめるのだか、そのうち高い山の峰あたりに「うるし」や「ななかまと」の葉が美しく色すき初める頃ともなると、急にひどく冷えこんで雪かちらついたりさえずる寒さが襲うことかある。この突然のようにやってくる寒さを土地の人たちは「てすちおとし」と呼んで来た。

「てすちおとし」は「てづつおとし」の訛で、「てづつ」は「不器用・不調法」等を意味する古語——紫式部日記や榮華物語、宇治拾遺物語等に見られる言葉であるが、近世にも巷間に通用していた

ものと見えて、例えば宝永元年（一七〇四）近松門左衛門作の「源平衛おまん薩摩歌」には

「アア跡も結はぬ絲筋の、一筋先へ抜けんや、一人残りてまだまたと、誰を相手に裾合はせ、針道違ひ着にくしと、手つつの浮名は取るまいとよ……………」

のような用例が見えるのであるか、現代に入ってこの言葉の用いられているところかとれたけあるかを知らない。ところかこの夏、高山市で聴取したところでは、「あの娘はとうもお針か（裁縫か）手ずつて……………」というように、年輩者（主に老人）の間に活きているという。

ともあれ、小半年にも近い冬を、雪の中に過さねはならぬこの地の人々にとって、その冬ごもり前にやらねはならぬ仕事は格別に多く、かけ足で通り過ぎて行く秋の日々は、たださえ目のまわるような忙かしさに追われるのであって、それかまた「あき」（収穫）もかたすかぬ中に突如として襲い来る寒さに見舞われたりすれば、必ずしも不器用者ならずとも尻をたたかされる思いかするだろう。まして何かと不器用で、仕事のはかとり兼ねている者には正に一大事というべく、「てすちおとし」とは名すけ得て名言である。なお、これを一名「しみたれおとし」ともいうのは、「しみたれ」は飛驒の方言（美濃の一部でも）では「だらしのないこと」「身だしなみのわるいこと」などを意味するから、冬したくを怠っている者をいましめる語気か強く感ぜられて、この頃ではより一般的に用いられているようである。いすれにしても千年の古語かこの山の国の中に息ずいているように思われて、いつまでも残したい気かするのは私だけであろうか。

七、ようかふふき

「飛驒のことは」（土田）には、「八日吹雪。十二月八日頃の吹雪の季節に、豆腐を買って来て、餡（あん）かけ豆腐を御馳走すること。旧十二月八日頃は吹雪が多いにはしまる。」とあるか、荒垣秀雄氏の「北飛驒の言葉」には、「旧十二月八日頃吹雪の季節に、下婢か豆腐を購ひ来て主人家族一同に餡かけ豆腐を御馳走すること。」としているから、恐らく元来は下婢か自らのもてなしとして、「みせに」（自分のお金）て買い求めた豆腐料理を振舞ったもののように思われる。いずれはあまり余裕などもありそうもない下婢であるか、年の暮も近くなった寒夜に、せめてものお礼心を示したいといういしらしい心すかいかからても起ったものとしたら、心あたたまる所為である。何にしても「八日吹雪」とは、いかにも雪の围らしく興趣深い言葉であるか、特に八日という日か選はれたのは何に由来するか未だ考え得ない。たまた、たまたま代情山彦氏か昭和十九年にラジオ放送をせられた原稿——（斐太高校教諭大野政雄氏所有の新聞切抜帖から）——によると、高山市内で現存する習慣の中に、「十日ふふき」というのかあり、それは農家の「鎌おさめ」（稲刈りの終わった日のこと。またその祝いのこと）という祝いの呼び名か改められたものであることや、やはり豆腐料理で祝う習慣であることなどか見えているから、いずれは長い冬こもりに入る前の、一種のきりをつける祝い事であったかと考えられるし、そろそろ根雪（ねゆき）の来そうなのこの季に、たまたま始まったこうした催しか、土地の人々みんなの行事となったときに、一定の日かきまってきたものかと考えられる。

八、つ ほ ける

これは炭火を埋めることを意味する言葉であるか、いかにも年中

「いろり」の火種を絶やさぬという飛驒路なればこそと感しさせられるものがあるのて取り上げてみたい。

飛驒では物を埋めることを一般的に「いける」と言い、植物を植えることさえも、「いける」といっているけれども、「つほける」は炭火や焚火の燠（おき）を埋める場合にのみ用いられる語であり、埋め方によって「いける」と区別しているのである。つまり灰を深く掘ってその中に炭火を埋めるのは「いける」のであり、炭火をかき集めて、その上に灰をおおひ、こんもりさせておくのは「つほける」である。炭火を長時間もたせるためには「いける」必要があるか、臨時に危険のない程度の火の用心ならば「つほけ」ておけばよいというわけて、真夏にさえいろりの火を見ながら食事をしないと気がすまぬという老人さえいるというこの地の生活か生んだ言葉たとえそうに思う。

それにしても「つほける」の語源は何から出ているのたろうか。土田氏は「飛驒のことは」の中で「窄（つほ）めるの意か」としているけれども、子音MからKへの転化もしくは相通の現象か、この地方の言葉に一般的にあるということでも立証されない限り、にわかにしたかい難い。強いて言えは「つほめる」と「いける」との混成語とても考えるべきかも知れない。或は栄華物語などに見られる「つぼぬ」||（「つほめかこふ」、「かこむ」「かこう」などの義）||というナ行下二段活用動詞を口語化（下一段活用）して「つほねる」と言ったものとの混用かと考えられぬでもない。

現在お互に何の違和感もたすに使っている「無理からぬ」という語は元来は「無理ならぬ」であるべきで、私の記憶では凡そ三十余年前まではまさしく「無理ならぬこと」、「無理ならぬ話」というナリ活用の語として用いられていたものであるのに、いわゆる日支

事変前後から「善からぬ」「怪しからぬ」の如きカ・リ活用の語との混乱から「無理からぬ」というように言われ出したもので、当時小学校における国語教育の研究会の席上においてその誤りを指摘したことがあったか、大勢のおもむくところ、いまや「無理からぬ」は大手をふってまかり通っていることなどと思えば、炭火をつぼめかこう意の「つぼねる」と「いける」との混雑から生れたのか「つぼける」であろうかと考えるか如何なものたるう。

九、「くもじ」―「にたく」

大野郡久々野町で聴取したところでは、「かふら」をその葉とともに塩すけにして、(特に多量の塩を用いるという)一年間も保存しておくといふ風味を生ずるので、それを「くもじ」といい、更にそれを塩出しして煮たものを「にたくもじ」又は「にたく」というので、「くもじ」はその独特な風味を賞するために特別な漬け方をするようにきいた。しかし元来の「くもじ」の語義は、国語大辞典に「菜の茎、又つけ菜をいふ、女詞」と示されている通り、「くぎづけ」の「く」に「文字」をつけて呼んたいわゆる女房言葉であって、必ずしもその特殊な漬け方をしたものに限るものではない。ところか本学の学生から聞くところによると、金沢市内でも「おくもじ」の語か用いられて、大根漬の古くなったものを、その大根に被せておいた葉とともに塩出して煮たものを言うとのことであるから、或は他の地方でもこれに類した呼び名か用いられているかも知れない。

ともあれ飛驒は漬物多用の地であり、優雅な女房言葉「くもじ」をそのまま伝えて来ている。その指すところも、現在の久々野町におけるように限定されたものでないことはもちろん、「あおくもじ

」「ひねくもじ」「にたくもじ」等の呼び名か用いられている通り、「くもじ」は蕪や大根の茎(葉)をつけたものの総称とも言うべく、その新鮮なものは「青くもじ」であり、月日の長くたったものは「ひねくもじ」であり、それを煮たものか「にたくもじ」である。―(土田氏は「あおくもじ」は「青食藻し」「にたくもじ」は「煮た食藻し」かとして、「じ」は接尾語であると敢て注解しているけれども、なつとくてきない。恐らく「あおくもじ」はその新鮮な青い色合いからいうもの、「ひねくもじ」は、長期間たくわえられて、現在の久々野町で呼ぶ「くもじ」に近いもの、「にたくもじ」はそれを煮たものと解すべきだと考える)―

凡そ長い冬ごもりを強いられる積雪寒冷地帯の人々か、冬期の野菜不足を漬物によって乗り越えて来たのは、必要にかられた生活の知恵か生んだもので、敢て飛驒地方に限るものではないけれども、「くもじ」という優雅なことはを伝承して、青くもじ、ひねくもじ、にたくもじとその用法に工夫をこらしていることを思い、その漬物作りの必要か「飛驒の菜洗い」という風物詩的情景を描き出すことにもなり、一面には「漬け菜と税金」という諺(年を過す前の過重な負担を意味する)を生んでいることなどと思わせると、「くもじ」と「ひだひと」とはきり離せないものと思われるのである。そして事実、飛驒の人々か漬物を愛用することは、想像以上で、例えばお茶うけに漬物を用いて来たのは、一面経済的事情によるところもあろうけれども、今やそうした心配のない家庭の人々てもいろりを囲んでの団らんには欠かせぬものとなっているし、この地では漬物さえ固く凍りつく寒さかつづくのであるか、その氷まじりの漬物「あおくもじ」を「ほう葉」にのせて、焚火の側において「てつき」で温めながら賞味する情景は、われわれには、珍奇にさ

見えるところである。

十、たたかれいわし(付) 節句いわし

「たたかれ」は山草を刈って緑肥とするものを呼ぶ方言である。自給肥料として山裾や段々畑の「とて」(傾斜した草地)草を刈る仕事は、山地の農家にとって夏の大きい仕事の一つであることは、敢て飛驒に限るものではないか、この山草や若柴を「たたかれ」と呼ぶのはとういうわけか。常識的に考えれば、荒い草刈りなので、たたくようになく、刈りをするところからの呼び名であろうか。ともかく「たたかれいわし」はその「たたかれ」を刈る初夏の頃に入荷するいわしを言ったもので、芭蕉の「目に青葉——」の句を連想させられるようなことではある。交通不便なこの山の国では、魚の入ることは少なかつたのか当然で、たまたま新鮮な生魚が入ることかあれば、これを「ふえん」(無塩の意)と称して珍重かつたというかそれだけに高価につくものだったことは想像に難くない。それか、長い冬か過ぎ、田畑の仕事に追われる頃になって、多量に獲れる「いわし」のひと塩ものは、この飛驒へもかなり多く入荷したものとと思われる。比較的安価な上に、成長しきって卵をもったいわしのひと塩物は、みんなの待ちのぞんだ美味であつたにちかいないし、恐らくは天秤棒をかついでの振り売りであつたことを想うと、あの金魚売りのそれにも似た初夏の風物詩的情景をくりひろげたのである。時あたかも「たたかれ」刈りに多忙な時節、山のひとひとの間には「たたかれいわし」という季節感豊かな呼び名が生まれたのである。

「節句いわし」は益田郡萩原町附近での用語である。名古屋方面から魚の入るこの地方も、高山本線開通以前には海の魚といえは塩

干物に限られ、それもたまたま入ってくるに過ぎなかつたようであるか、雛の節句か近づく頃になると美味ないわしの干物か多量に入荷するので、これを「節句いわし」と呼び、雛祭りの供物には必ずこれを加えねばならぬものという習慣になつてゐるのである。汽車が開通し、鮮魚の買出し人か名古屋の中央市場まで毎日出かけるこの頃になつては、もはや「節句いわし」へのあこかれは一つの想い出にとまつてゐるに過ぎないけれども、雛祭りに供えるという習慣だけはつゞいてゐるようて、この話をしてくれた店の主婦(六十才くらい)は、雛祭り風景の様相ともになつかしげに語つてくれたものであるか、「いわし」を供物にするしきたりは或はつづいても、「節句いわし」ということははやかて忘れ去られてしまふのかも知れない。

十一、なたじるし

大野郡宮村では、山から「ほた」(栴)をきつて出すのに、宮川へ落して流し、下流の土場で上げたもので、その所有者を明らかにするため一本一本に目しるしを刻みつけたのであつた。これを「なたじるし」と呼んで、そこに自ら一定のきまりを生じ、決して他人と混同するようなことは無いという。例えばそれを刻みつける位置を上、中、下の三箇所に分けて、ほだ木一本に刻みつける線を四すじ以下とする原則が守られて、その刻む線の深淺や線の形や方向(水平に刻みつけるか、斜に刻むか、そして右上りに刻むか左上りに刻むか等)と、上中下の位置とを組み合わせる方法によるもので、これによると数学的には六百以上の区別かてきるといふから、在村二百戸程のこの部落ではまことに頃あいの区別法となり、十分に用を達したのである。

今ではもはや「ほた」を流して運ぶことなくなつたけれども、「なたじるし」はそのまま各家のものとして残り、その農具などに用いられている。例えば稲はざ用の丸太にもこれが刻まれているから、急な防水工事など必要に応じて供出して、その用済みの際には間違ひなく各自の手に返されるという。

付記—この語は本年九月十日、宮村に代情通藏氏を訪ねた際に、次の「はちはん」その他と共に教示を得たものである。氏は同地素封家の産、かつて高等学校長として在職多年、特に飛驒地方教育の指導者として活躍せられた頃から私の深く心服せる人。十数年来、中風による半身不随の病苦を克服し、尚学究と民芸品製作と郷土指導とに精進し、就中ひだの山に關する蘊蓄の深さに至つては代情山彦の名を以て広く斯界に周知せられる学究的にして風格高き老紳士である。ここに付記して深く謝意を表し、且はご健勝を念したい。

十二、はちはん

土田氏の「飛驒のとは」では、この語をあげて「木戸御免。当然のこととしておっぴらに。(いつの芝居もおりは——で見れる。)」と例解しているか、語源については説いていない。ところがたまたま前記代情氏から興深い談をきくことかできた。

「あまり厳密にやらなくても大いのところで作っておけばよいというような時に、当地方では、はちはんでやっておくという。何でも四国周辺にある一小島にもこれと同じ言葉かあるとかで、その小島では十三軒ほどの住家かあるとのことだか、何か事を決する場合に全員の承認を得なくても、八軒だけの承印をとればそれで決定してよい慣習になつているところから「八判」の意でこの語か生まれたのだと聞いているけれども、当地方宮村では趣を異にする。即ちここでは入会山(共有の山)の材を採る時に、そ

の伐り出したものの一割五分だけ供出して、あとの八割五分は自分の所得として勝手に処分し得るしきたりかあったもので、八半(八、五)は自分の気ままになるというところから、一般に自分の都合でいいかげんにすましておくことを「はちはん」(八半)でやるということになつたと言われている。」

というのである。私はこの言葉か他の地方でも用いられているか否かを知らないが、いわゆる「目八分」でやるというようなことも連想されると共に、この語源解説はいかにも山の国のものらしくおもしろいと思う。

十三、やまわろ

これも代情氏から聴取したものである。

飛驒の山人たちは山の怪として古くから「やまわろ」の存在を信じて来た。深い山に入った「木こり」は弁当かいつの間にか無くなつていふことかあつて、背負つていふものさえ知らぬ間に空になつていふことかあるなどと言ひ伝えられて、それはみな「やまわろ」とられるのだというのである。いわは「やまわろ」は山の妖精とでもいふべきもの、あいきょうのあるいたすらものであると考へられて来たやうであるか、今、高山市内の土産物店に魔除けとして売られて出されている「山ひこ人形」はこれを主題にして代情氏の創作されたもの、「やまわろ」の顔を象徴化し、それに飛驒の山々か見せる目もあやな美しくい色とりを写し出したもので、そのグロテスクな顔貌と多様な色彩はまさに山の神秘を思わせる逸作である。

元来、山びと達は山の神秘を信ずるところか深く、山に馴れ山をあなとることを強くいましめて来たものである。例えば「そま方衆」(伐木の仕事をする者)でも「日備方衆」(運材に従事する者)で

も、大きい山入り仕事になると一定のしきたりを厳守したもので、入山第一日には必ず山籠り用の掘立小屋を構え、且それには一切釘を用いず、「ねりそ」(榎木をねして縄の代用としたもの)で締め結うべきこととされて来たというし、その夜はこ幣餅を作って、ます山神を祀らねはならぬという慣習があったというか、小坂町で聴取したところによると、昨今でも、山に入れば伐木にかかる前に先ず立木を削ったりして山神まつりをするのかしきたりになっており、これを怠ると必ず不祥事にあうと信じられているという。

答へ二声 呼音は三声 応へしやるなよひとよひね(飛驒の歌謡と民俗)所収)

の如き山の歌は、やはりこうした山の怪異を信するところから生まれたものというへく、山田白馬氏か「一声呼ひは怪鬼のわざ、氣の迷ひ、狐狸亦決して重ね呼ひは出来ないものと伝えられ、一声を聴く事を強く忌まれ、是れに応へれば必ず怪鬼に出会するとまで信ぜられている。」(三八頁〜三九頁)と解説しているのもまさにこの間の消息を説いたものである。

尚「やまわろ」の語義は「山和郎」と考えられる。大日本国語辞典「わろ」の部には、「和郎。わらは、わらはべ、をのこ、奴、僕などにもいふ。」として、「日本振袖初」『わろ共は牛の食み物事欠かぬやうに、堤べりの草刈れ』の用例を示しているか、この近松門左衛門作にかかる浄るりは享保三年(一七一八)上演のものであるし、この外にも「薩摩歌」(一七〇四年上演)はしめいくつかの浄るりにこの語が見えるから、江戸時代から一般巷間に用いられて来た言葉と考えてよい。私の郷里美濃の北辺では「かっぱ」のことを「かわらんべ」と呼んでいるかこれか「川童」を意味し、飛驒でも同じく「かわらんべ」「かおろ」「かごろ」などと呼ぶことを思い

合わせれば、「やまわろ」はまさに「山童」の義であることを知り得るのである。

結 び

飛驒の風土と慣習とを知るよすかとして、特異な風土語を拾い上げてみようとしてから半年余、未だ日も浅く、不才な上に余事に忙殺されてわすかに十数語を採り得たのに止まるのは不本意であるか、ひとまず以上を以て「調査報告第一報」とする。他日機を得て更に考察を重ねてみたいと思う。

それにしても本調査に当って、岐阜県教育委員会、飛驒各市町村の当局の方々はしめ、代情通蔵氏、大野政雄氏外多数の方々には格別な便宜とご教示を与えていただいたことを深く感謝する次第である。

参考資料

- | | | | |
|-----------------|------------|--------|----------|
| 飛驒のことは | 土田吉左衛門 | 昭西、八、五 | 濃飛民俗の会 |
| 岐阜県益田郡誌 | 益田郡役所 | 大五、三、六 | |
| 益田郡川西村誌 | 川 西 町 | 昭西、二、 | |
| 北飛驒の方言 | 荒垣 秀雄 | 昭七、 | |
| 飛驒の年輪 | 熊原 政男 | 昭三、 | 錦 成 社 |
| 飛驒の歌謡と民俗 | 山田 白馬 | 昭五、〇、一 | 飛驒考古土俗学会 |
| 雑誌「飛驒春秋」 | 第十年第四号外多数 | 昭三、四、三 | |
| 大日本国語大辞典 | 上田万年・松井簡治 | 大四、 | 富 山 房 |
| 大 言 海 | 大槻 文彦 | 大七、 | 富 山 房 |
| 近 松 語 彙 | 上田万年・樋口慶千代 | 昭五、五、三 | 富 山 房 |
| 校註日本文学大系 | 国民図書株式会社 | 昭三、 | |
| その他国文学関係図書並に辞典類 | | | |